

令和2年度広島県公立高等学校入学者選抜一般学力検査の結果について

- ・令和2年3月5日(木)・6日(金)に実施した、令和2年度広島県公立高等学校入学者選抜「選抜(Ⅱ)」における一般学力検査の結果を取りまとめました。
- ・この結果については、教科指導の参考とするため、県内公立中学校及び高等学校等に配付します。

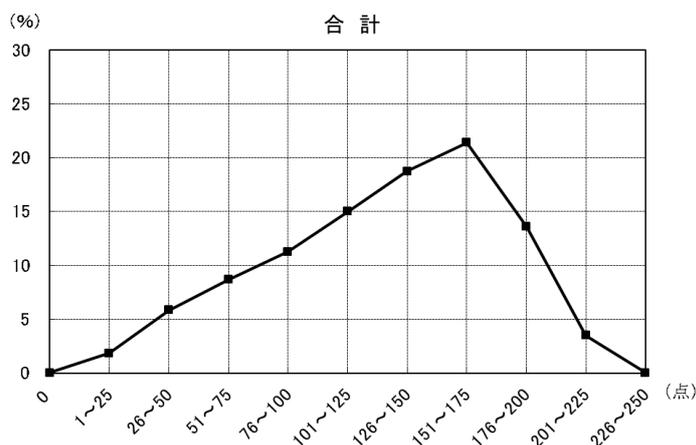
【一般学力検査結果の概要】

- 5教科の平均点は25.8点(平成31年度は22.2点)

各教科の平均点は次のとおり

教科	国語	社会	数学	理科	英語
平均点(50点満点)	26.5	22.0	28.2	28.6	23.9

- 5教科合計の得点分布は、全体の形はやや右寄りの山形で、30%以下の得点層に属する受検者は少なくない。5教科に共通した課題として、日常生活などを想定した課題解決の場面で、資料等から読み取った情報を、既習の知識や学習内容等と関連付けて考察し、自分の考えをもったり判断をしたりして、その過程や結果を表現することが十分にできていない点が挙げられる。



I 一般学力検査結果の概要

令和2年3月5日(木)・6日(金)に実施した令和2年度広島県公立高等学校入学者選抜における一般学力検査について、その概要を取りまとめたので、今後の学習指導の参考としてください。

1 出題について

一般学力検査問題の出題に当たっては、中学校学習指導要領に示された各教科の目標に基づき、分野・領域のバランスに留意するとともに、基礎的・基本的な内容を中心に
出題した。また、総合問題や記述問題などを取り入れることによって、思考力・判断力・表現力などをみるよう配慮した。

出題の大問数等については、次のとおりである。なお、英語においては、例年どおり実音聴取による問題を出題した。

各教科における設問数

内容	国語	社会	数学	理科	英語	合計
大問数	4	4	6	4	4	22
設問数	21	24	18	30	25	118
選択問題	5	4	2	10	13	34
記述問題等	16	20	16	20	12	84

* 記述問題等には、漢字の書き取りや選択した理由を併せて記述する設問を含めている。

2 検査結果の概要について

各教科の平均点、標準偏差及び得点分布については、次のとおりであった。

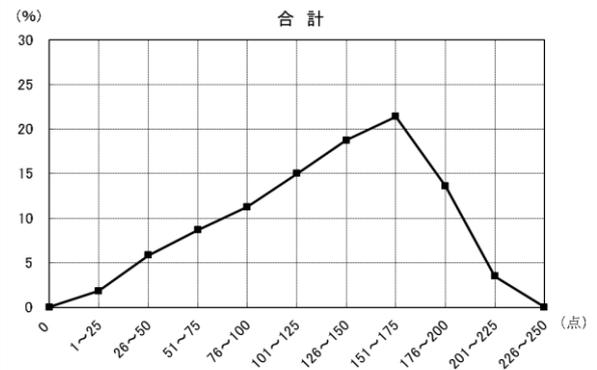
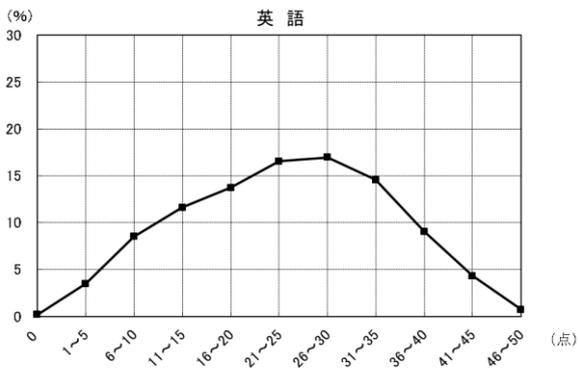
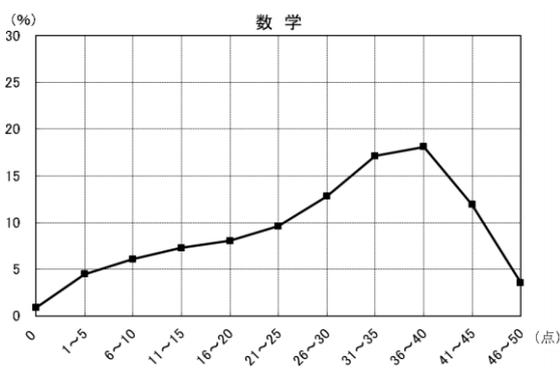
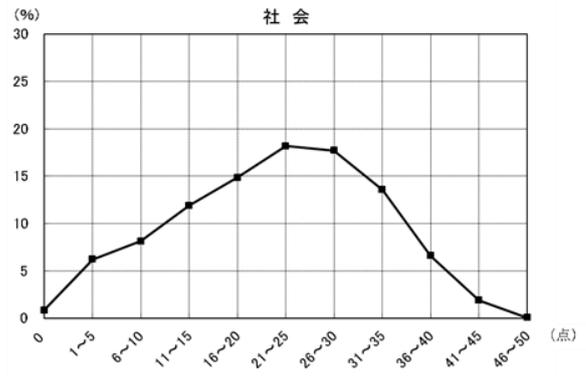
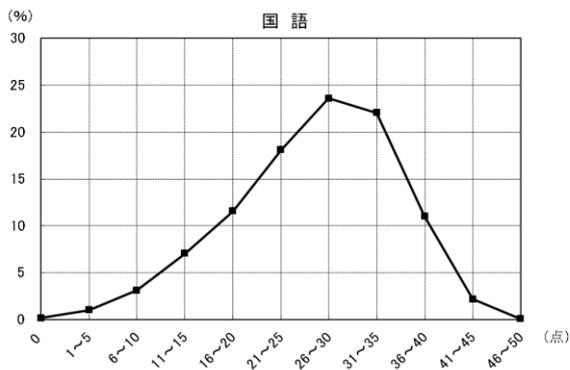
各教科(50点満点)の平均点

教科	国語	社会	数学	理科	英語	5教科平均
令和2年度	26.5	22.0	28.2	28.6	23.9	25.8
平成31年度	23.6	21.6	21.0	23.3	21.3	22.2

各教科(50点満点)の標準偏差

教科	国語	社会	数学	理科	英語
令和2年度	8.4	10.1	12.2	12.5	10.4
平成31年度	8.6	10.4	10.9	11.4	11.0

(各教科の得点分布)



5教科合計の平均点は昨年と比べて上昇した。得点分布の状況を示すグラフの全体の形はやや右寄りの山形で、30%以下の得点層に属する受検者は少なくない。

各教科の得点分布を比較すると、国語では全体の形はやや右寄りではあるが、中央が高くなった山形となっており、応用的な問題に十分に対応できていない受検者が多いと考えられる。社会及び英語では、なだらかな山形となっており、基礎的・基本的な学習内容の定着が不十分な受検者が多くいると考えられる。数学及び理科では全体の形が右寄りの山形になっており、基礎的・基本的な学習内容

が定着している受検者が多くいると考えられる。

教科別にみると、国語については、昨年と比べて平均点は上昇し、60%を超える得点層に属する受検者が増加した。一方、30%以下の得点層に属する受検者は減少したものの、全体の11.4%と少なくない。今後学習を進めていく上での基盤となる「漢字の読み」と「漢字の書き取り」についての正答率はそれぞれ94.9%、85.0%と高い。また、分野・領域別にみると、文学的な文章についての正答率が低い傾向がみられる。特に、論の展開に即して要旨を的確に捉え、それを適切に表現する力に課題があると考えられる。

社会については、昨年と比べて平均点はやや上昇した。30%以下の得点層に属する受検者は全体の27.1%と多かった。分野・領域別にみると、歴史についての正答率が低い傾向がみられる。また、地理的事象について、地図・資料を読み取って考察し、それを表現する力に課題があると考えられる。

数学については、昨年と比べて平均点は上昇し、60%を越える得点層に属する受検者が大幅に増加した。一方、30%以下の得点層に属する受検者は大幅に減少したものの、全体の18.8%と少なくない。今後学習を進めていく上での基盤となる「簡単な数・式の計算」については正答率の平均は80.9%と高いものの、数の性質を発展させ、新たな性質を見いだす力には課題があると考えられる。また、分野・領域別にみると、関数についての正答率が低い傾向がみられる。

理科については、昨年と比べて平均点は上昇し、60%を越える得点層に属する受検者が大幅に増加した。一方、30%以下の得点層に属する受検者は減少したものの、全体の19.3%と少なくない。また、分野・領域別にみると、物理についての正答率が低い傾向がみられる。特に、運動している物体に働く力について、摩擦力や慣性の法則を基に考察する力に課題があると考えられる。

英語については、昨年と比べて平均点は上昇した。30%以下の得点層に属する受検者は減少したものの、全体の23.9%と多かった。分野・領域別にみると、日常生活の場面において、表現内容を工夫してコミュニケーションを行うことについて正答率が低い傾向がみられる。また、文章の概要や要点を理解し、質問に対する自分の考えが読み手に正しく伝わるように英文を書く力に課題があると考えられる。

5教科に共通した課題としては、日常生活などを想定した課題解決の場面で、資料等から読み取った情報を、既習の知識や学習内容等と関連付けて考察し、自分の考えをもったり判断をしたりして、その過程や結果を表現することが十分にできていない点が挙げられる。

この点を改善するためには、まず、日常生活や自然・社会における事象の考察、また、コミュニケーションの場面などにおいて、目的や状況等に応じて判断した

り表現したりするのに適当な課題を設定することが重要である。そして、その課題を解決する過程において、精査した情報を基に自分の考えを形成して文章や発話によって表現し、さらに、お互いの考えを適切に伝え合って多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりして、自分の考えを広げたり深めたりすることが重要である。この学習指導を行う際に大切なのは、それぞれの教科の特質に応じた見方・考え方を働かせて思考・判断させていくことである。新学習指導要領を見据える広島版「学びの変革」アクション・プランにおける「主体的な学び」が目指すのは、各教科等の内容についての本質的な理解である。そのためには、習得・活用・探究の過程の中で、各教科における見方・考え方を働かせる学びを設定するとともに、教科等横断的な視点を取り入れた指導を行うことで、深い学びにつなげていくことが重要である。

また、高等学校においても、各教科・科目の系統性を理解した上で、義務教育段階の指導状況や生徒の発達段階、生徒の言語能力を踏まえ、授業の構成や指導の在り方を工夫・改善していく必要がある。